

# ああ、相談業務

## ～ 杞紗さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

24

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

保護者からの虐待を受けた子どもが思春期以降、リストカットや大量服薬、自殺未遂等を繰り返す事例は多い。今回はそういうケースを描いてみようと思う。

## 家族

杞紗さん（仮名）は当時25歳。三人兄弟の真ん中で、2歳上の兄と、3歳下の妹がいる。父親は50歳で運送業、母親46歳は杞紗さんが中学校1年の時に離婚し、現在パートナーと暮らしている。父方祖父母、母方祖父母はともに遠方に住んでいる。

## 相談経過

筆者が最初に杞紗さんに会ったのは、小学校のスクールカウンセラーをしていた時である。ただし、その時はカウンセリングに杞紗さんが来たことはなく、先生方も、「変な子」というイメージだけで、カウンセリングに繋ぐことが無かった。それでも、小学校低学年だった杞紗さんは、廊下の隅のちょっとくぼみになっている壁面に、時々隠れていたり、机の下にもぐっていたりする様子を目撃しており、先生に「あの子何かあるんじゃないかな？面談できないかな？」と言ってはみたものの、先生は「変な子だけど、それ以外に特に問題はないので」とつないでもらえなかった。そ

その後その小学校に行くことがなくなったため、それっきりになっていた。それでも気になっていた。その後中学校での様子なども気にかけていた。問題行動として、リストカットが見られるとの情報はあったし、杞紗さんがかなりひどい虐待にあったらしいという噂は耳にしたが、中学校のスクールカウンセラーが担当しているということで、筆者に繋がることは無かった。

高校に進学して間もなく、当該高校のスクールカウンセラーから筆者に繋がって来た。情報としては「多重人格、リストカット、オーバードーズ（大量服薬）がある。病院受診も勧めているが中々受診に繋がらない。家族関係にも問題があるのではないかと思われる。」とのことであった。

初回面接は、北海道の短い夏が始まる6月初旬のことで、1人で来室された。杞紗さんに会うのは小学校以来だったが、横も縦も大きくなっていった。以前杞紗さんがいた小学校のスクールカウンセラーをしていたから、杞紗さんのことを知っていると言え、「そういえば見かけたような気がする」と言い、結構赤裸々に今までのことを語ってくれた。

3, 4歳ごろ、ちょうど妹が生まれた後くらいから母親の精神状態が悪化し、暴れたり騒いだり酷かった。杞紗さんは、決して聞き分けの良い子ということではなく、どちらかというと活発な子だったため、母親から叩かれること日常茶飯事、更に父親からも殴られたり、逆さづりにされたり冬に締め出されたり、ひどい虐待を受けていたという。しかし、児童相談所が介入することは無かった。誰もその虐待に気づかなかったという。母親は精神病院に何度も出入りしていて、その間父親が子どもたちの面倒を見てくれた。それでも、小学校に上がったからは、妹の面倒を看させられ、兄は我関せずで勝手な行動をとっていたが父親は兄には何も言わなかった。そんな兄を随分恨めしく思っていた。学校から帰ったら自分の宿題などを片付け、食事の準備などを父親に言いつけられたとおりに行い、妹と一緒に遊んだりして面倒を見ていたようだ。

その後、父母は離婚し、父子家庭となってからは、杞紗さんが家事をある程度担うようになった。中学に進むと時々父親が長距離で出かけることもあり、数日帰ってこない為、その間の家事一切は杞紗さんの仕事となった。友人と遊びたくても、中々遊ぶ時間もなく、学校が唯一友人と関わる場となった。しかしその学校でも、女子からのいじめが勃発し、不登校傾向となった。女子からのいじめは、明らかな仲間外れやネット上での悪口の流布、時にはばい菌扱いなどもあったようだ。その頃からネットゲームにはまり、ゲームで知り合った子とやり取りをするようになっていった。

兄はその後寮制の高校に進学し、家にいなくなった。妹と二人で留守番することも多く、妹もゲームにはまり、二人でゲームをすることもあったが、基本的には別々にゲームをしていたようだ。

妹と仲が悪いわけではないが、妹は友達と遊びに行ったりしていたのでいつも一緒にゲームをするという雰囲気ではなかった。一方杞紗さんは家にいなくちゃという思いから、出かけることは少なく、その様な中リストカットをするようになった。

最初は何となくしてみた、という感じだったものが、辛いとき、苦しい時、必ずするようになっていった。ネットで知り合った仲間同士でリストカットの跡を見せっこするなどということもあった。学校に行けば女子たちに白い目で見られ、悪口を言われるので、学校から帰るとリストカットをせずにはいられなくなった。学校に行かないと、父親に連絡が行き、その結果殴られるので、学校に行くしかなく、板挟み状態だったようだ。スクールカウンセラーと話したことはあったが、余力になってもらえなかったそうで、1, 2回行って辞めてしまったという。

勉強はそこそこできたので、中くらいのレベルの高校に進学することができたが、リストカットは悪化し、だんだん上腕部や太もも、腹等様々なところをカットするようになった。加えて、薬もプロン（咳止め）、メジコンなどネットで仕入れた情報を元に、オーバードーズをするようになった。

ていった。同時にいくつかの人格を抱えるようになり、気が付いたら遠くにいて、どうやってそこに行ったのか覚えていないという状況も出てきたという。

筆者のところに来た時は、多数のリストカットの跡と多重人格、オーバードーズという三つの問題を抱えた状態であった。

まずは病院受診をあらためて勧めたが、父親が受診を納得しないという。何故と訊くと「母親ほどひどい状態じゃないから受診は必要ない」というのだそうだ。父親と話したいというと、杞紗さんは頑なに拒否し、何とか父親を説得してみると言い張るので、待つことになった。過去の虐待については聴いたが、最近はないのかと聞くと、最近は殴られることは無いとのことで、それはひとまず良しとし、一応トラウマ処理をした。人格交代だが、何人ぐらいいるのかと聞くと、19人という。丁寧に一人一人を説明してくれた。幼児もいれば、自分より年上（その当時杞紗さんは高校生で16歳）19歳とか25歳くらいの人格もいる。性別も関係なく男子も女子もいる。また、それぞれが役割を持っていて、ゲームが得意な人格がゲームをするとき変わって出てくれるし、絵が得意な子が絵を描くときでてくる、数学が得意な子が数学の授業を担当する、バイトの時は年齢が上の落ち着いた人格が出る、などである。最初の内は他の人格が筆者の前で出てくることは無かったが、しばらくしたら様々な人格が出てくるようになった。別人格を持ち始めたのは多分4、5歳くらいだったと杞紗さんは言う。そのころ大変だったので、さもありませんと思う。そして辛いことがあると別人格を作ることが繰り返されてきたのだ。

人格が交代するとき、杞紗さんは一瞬眠ったようになり、起きた時に別人格になる。筆者のところに来ている多重人格のクライアントさんたちにほぼ共通してみられる現象で、一瞬寝るといふか、切れるといふかそんな感じで、そのあと別人格が出てくるのである。そして、幼児の時は話し方でわかるが、誰が出てきたのかわからない時が

あるので名前を聞くと、〇〇とか××とか名乗ってくれる。19人の人格は一応聞いたので、表にしており、誰がどの人格かを確認しながら話を続けていく。

19人の中にはひたすら死にたいという△△がいて、その人格が出てくると、冬の川に入ろうとしたり、橋の上に立っていたり、オーバードーズをしたり、リストカットも深く切ったりした。

人格統合をしないかと提案したこともあったが、杞紗さんは統合したい人格がないと言い、ずっと経ってから一人だけ希望があり統合できたことはあった。

更に杞紗さんにはもう一つ困った行動が見られた。それが不順異性交遊（売春行為）である。そのことを聞いてから、売春は辞めることを後ろの人格（他の人格）にも聞こえるように話して約束させた。

何故売春をするかと言えば、当然理由は簡単でお金が欲しいからである。父親からの小遣いはないがアルバイトのお金だけで足りないのかというと、父親がギャンブルにはまっていて、時々バイト代からお金を貸してと言って持っていられるのだそうだ。

こういう事情も受診を先延ばしにしている要因なのだろうとわかったので、父親と話すことにした。杞紗さんは抵抗したが、それでは話が進まないし、このままでは生死に係ると説得して、電話で話すことにした。

父親に受診が差し迫って必要であることを話したところ、外面が良いのか、特に反発することは無く、了解してくれて、無事に受診に繋げることができた。その結果出た診断は、解離性同一性障害、ADHD、自閉症スペクトラム症となった。投薬を始めても、時々悪化して入院することもあったが、治療は続いている。この間に高校は無事卒業できたが就職は難しく、アルバイトでついでいた。

杞紗さんとは月1回程度面談を続けてきた。高校1年の時からだから9年になる。その間に彼氏とくっついたり離れたり、母親との関係が修復さ

れ、母親と一緒に働いたり、農家に働きに行ったり、人と関わる中で気持ちが上がったり下がったりをしながらも少しずつ安定してきた。診断を受けたことで、精神障がい者手帳の取得、障害者年金の取得に向けて動き、どちらも得ることができたので、あとは B 型就労となったが、最初の就労先では人間関係が上手くいかず、直ぐに辞めてしまった。しばらくどこにも行かずにいたのだが、コンピューター関係の仕事をしている B 型作業所ができたこともあって、そちらに入り、継続して働けるようになった。最近他の人格は後ろで寝ていることが多くなってきた。良い傾向である。

今、杞紗さんは自分の辛い人生を振り返り、当事者の会を立ち上げ、積極的に活動している。

## まとめ

杞紗さんがもっと早い時期、小学校低学年の時期にカウンセリングに繋がっていたら、そして児童相談所や病院にもつながっていたら、ここまで酷いことにはならなかったのではと悔やまれるが今となっては仕方がない。

子どもの頃に虐待を受けていた人が、思春期以降、解離性同一性障害（多重人格）やリストカット、摂食障害、オーバードーズの問題を抱えていたり、鬱やパニックになっているケースに度々出会う。特に鬱やパニックになっている方の多くが、虐待や小中高でのいじめられ体験を持っている。

人は人に対し、どうしてもこうも残酷になれるのだろう。小学校低学年くらいまでは、人の気持ちをおもんばかることができないから、思ったままを言ってしまって傷つけることがあるのはわかる。しかしある程度大きくなったら、このことばが相手をどれだけ傷つけるかについてわからない筈もない。それでも言葉の暴力をするし、SNSでの拡散も故意に行う。小中高ではこの手の問題があちこちで起こっている。スマホを持っているからでもある。高校生はともかく、小中では、保

護者のスマホの共有でよいのではとずっと思っているし、いろいろなところの講演会でも言い続けている。でも学校ではタブレットが各自にわたり、スマホも中学生のほとんどが持っているし、小学生でも高学年では多くの子がスマホを持っている。本当に必要な、使い方が間違っているのに持たせておいて良いのか、今一度考えるべきではないか。

そして、虐待は親子という最も安心・安全であるべき関係の中で起こっている。この経験は人間としての基盤を根底から脆弱化し、人への信頼感を否定し、そして自分自身をも否定することになる。

多くの虐待サバイバーと面談する中で、自分を守るために解離せざるを得なかった状況がわかるだけに、その傷の深さをみると、人間の残酷さを考えずにはいられない。文明が発達すればするほど、人間は動物的本能から遠ざかり、子育てに困難を呈するようになってきていると感じる。

杞紗さんのように、被虐待児として、いじめ被害者として、そして発達障害を持った一人の人間として、生きることによって困難を抱えながらも生き延びて、時には死にたくなったり、嫌な気分から逃れたくてオーバードーズをしたり、余りしんどくなると解離をしたりして自分を何とか守ろうとしている人がいる。そういう人たちが、小さくても生きがいを見つけ、少しでも楽しく、少しでも楽に、笑顔で生きていける世の中になっていくように、我々支援者はコツコツとできることをしていくのだ。